

図5 副堤工事計画断面図 (大郷市内)

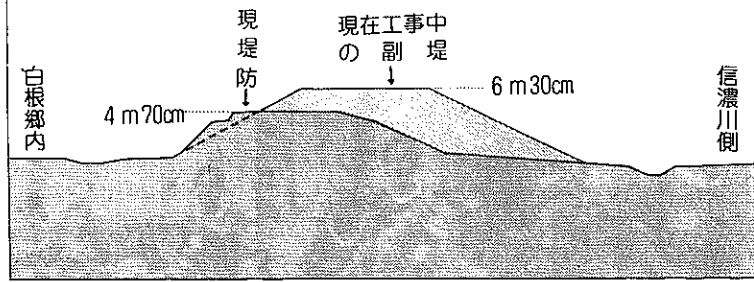
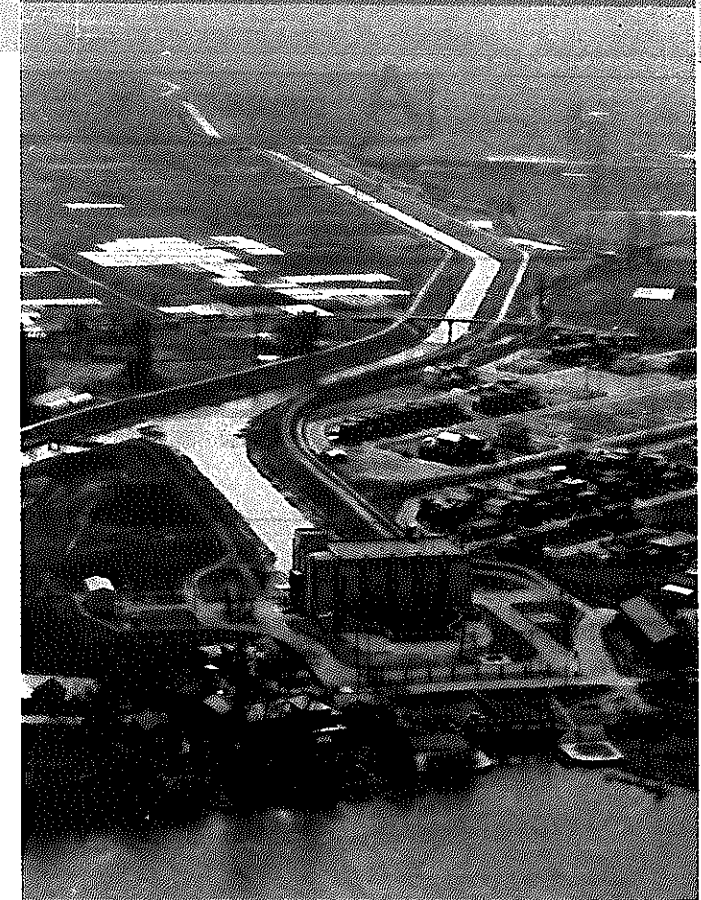
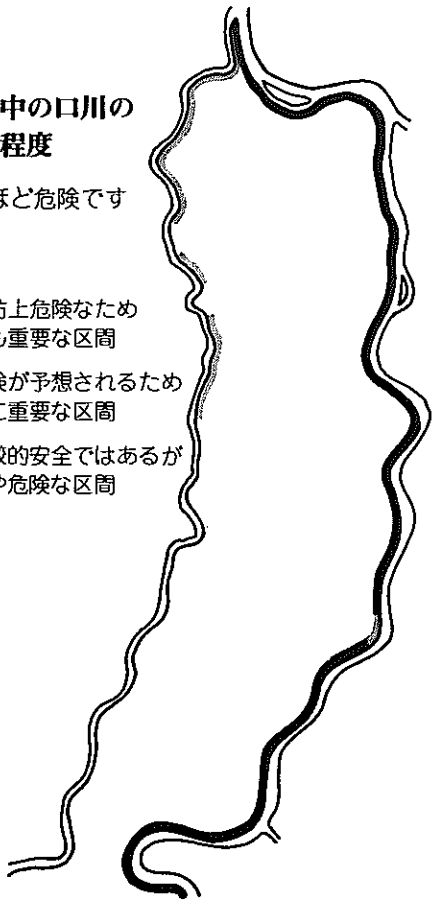


図3

信濃川と中の口川の安全性の程度

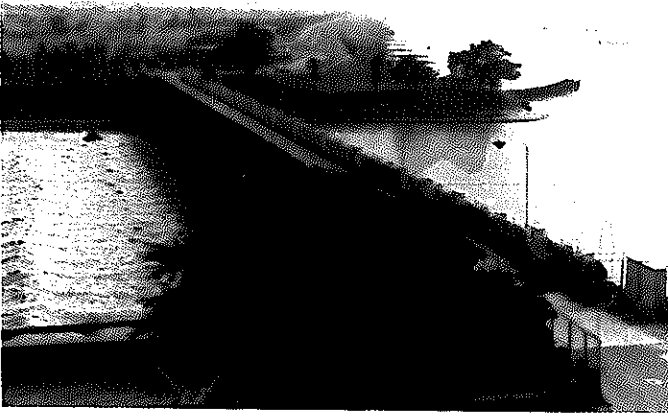
色が濃いほど危険です

- 水防上危険なため最も重要な区間
- 危険が予想されるため次に重要な区間
- 比較的安全ではあるがやや危険な区間

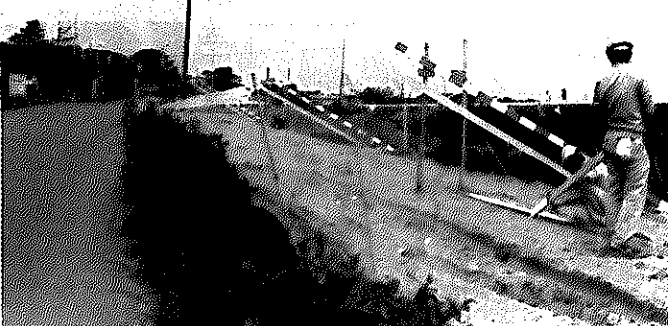


白根排水機場と中部排水機場とで毎秒55tの排水能力をもつ

大河津分水の洗堰。写真左が信濃川下流



副堤工事の中の大郷市内



インタビュー



国枝重一 調査設計課長

危機感をもって河川改修に協力を

建設省信濃川下流工事事務所

私たちが進めている信濃川下流改修計画は、百五十年に一回程度起こることが予想される洪水に対処できるものと考えています。計画高水流量を安全に流下させ、各支川の急激な出水を円滑に合流させるためにも、堤防のかさ上げや河道改修、それに水門施設などを充実していく

必要があります。四十二年の羽越水害は千年に一回の洪水と言われ、また長崎水害はそれを上回る洪水ですから、もしこれと同程度のものが信濃川流域に起きた場合、大災害は免がれなかったでしょうね。安全度が極めて低いだけに早期に計画を遂行したいのですが巨費を必要とするうえに、問題も山積しており、計画の進み具合はかなり遅れている現状です。最近はこのといった洪水が起きていく地域ですが、危機感をもって、河川改修に協力して

「災害は忘れたころにやってくる」と言います。水害に遭う前に、私たちの住む白根郷が、こうした地理的環境にあることを良く理解し、いざという時のためにも、水に対する認識と備えを万全にしておきたいものです。

水に対する認識と備えを

現在、市はもちろん、国県が力を合わせて、改修計画の早期実現と、水防計画に基き、的確な対応が図れるよう努めています。

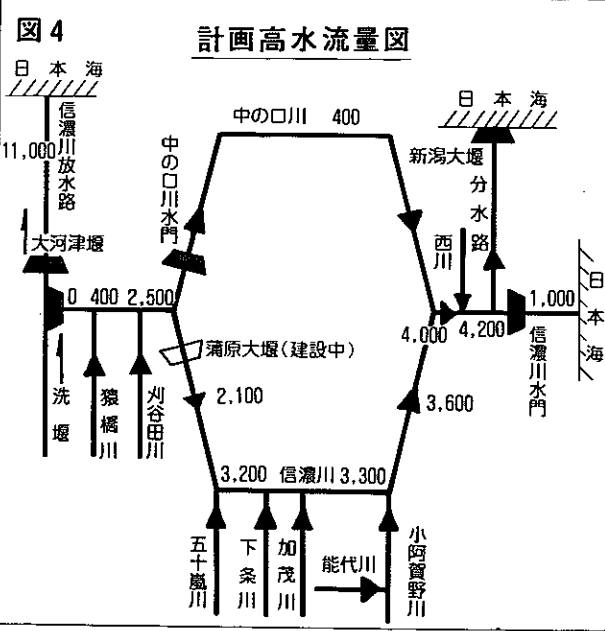
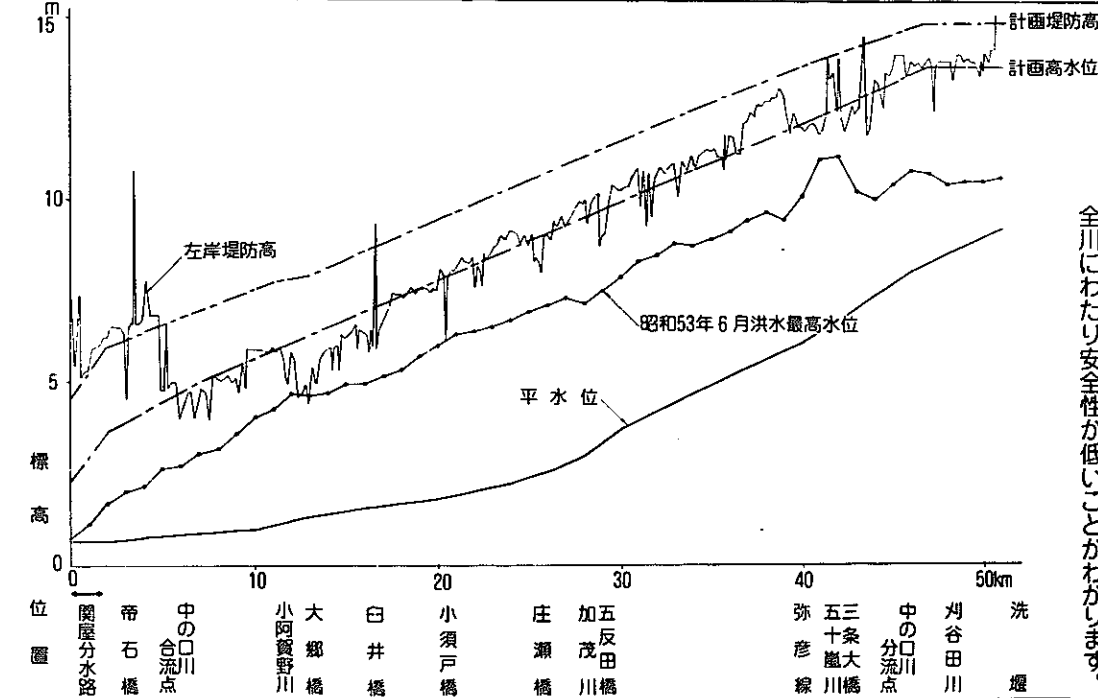


表2

堤防天端高と昭和五十三年六月二十六日洪水の最高水位の関係



大河津分水路完成後最大の洪水であった昭和五十三年の六・二六水害の最高水位は、大郷地点で越水しています。最下流部を除き、全川にわたり安全性が低いことがわかります。

高さも幅も不足している堤防

図4をごらんください。千曲川や魚野川の水を集めて流れる信濃川は増水しても大河津分水から日本海へ直接流すため、その下流はまず安心です。しかし、その信濃川下流も関屋分水までは、刈谷田川、五十嵐川、加茂川、能代川、小阿賀野川と、いずれも大災害が記憶に新しい中小河川が目白押し。これまではその上流部で破堤したため、下流の信濃川ではさほどの影響はありませんでした。しかし、その河川のほとんどが改修を終えたことから、増水すると直ちに下流に流れ込み、直接白根郷の堤防にぶつかることになるわけです。しかも郷内の堤防は、高さが不足しているうえに幅も狭いことから、決壊の危険性は高く、越水はもちろん、決壊の危険性を指摘する堤防が半数という危険な状態です。このことは中小の河川改修からみて、本流の信濃川の改修が、計画通りに進んでいないところに不安があるわけです。

完成までには長い歳月が

信濃川下流工事事務所(新潟市)を訪れますと、早速河川改修計画を教えてもらいました。それによると百五十年に一回の洪水確立を想定し、当面の対応として図5のような高さ

てしまします。